

聖書：コリント人への手紙第一 12：27～31

説教題：はるかにまさる道

日時：2022年11月20日（朝拝）

コリント教会の礼拝と関連して生じていた諸問題の3つ目、御霊の賜物についてのパウロの言葉を見えています。これまで見て来た通り、その中心にあったのは異言の問題でした。異言とは人々に理解できない言葉で神に向かって話したり、祈ったり、賛美したりするものでした。人々はこの賜物を熱望し、それを語るができる人はそれで高ぶり、それができない人は劣等感を覚えていたようです。この異言に対する態度によってコリント教会にはさらなる分裂が生じ、その礼拝は礼拝どころではない状態になっていたようです。

そんな彼らにパウロはイエスを主と告白するクリスチャンは全員、御霊を受けた人であること、また御霊はそれぞれに違う賜物を分配しておられることについて述べて来ました。彼はそれを説明する際、からだのたとえを用いました。からだには色々な部分があります。皆が目ではありません。皆が耳ではありません。そこには手もあり、足もあります。細かく数えたらきりが無いほど多くの部分があります。それにもかかわらずからだは一つです。各部分が互いに支え合い、助け合い、一つのからだを構成しています。かえって普段は目立たない、弱くて劣っているように見える部分こそ、実はなくてはならない重要な部分であると言われました。

これを受けてパウロは今日の27節でキリストのからだなる教会も同じであると言います。教会はキリストのからです。からだは色々な部分から成っているように信者一人一人はまさにからだの一つ一つの部分に当たります。皆が同じはありません。それぞれに与えられた賜物は違っており、それぞれが担うべき使命や役割も違います。それでいいのです。それが神の御心です。その自分に与えられている賜物に従って自分の果たすべき役割を果たして行くこと、そして一人でそれをするのではなく、互いに助け合い、支え合い、協力し、協調しながら歩むこと。これが大事であるということをパウロは述べています。今日の箇所はこのようにこれまで述べて来たことのまとめの部分となっています。

パウロは28節で改めて神が教会に与えてくださった賜物について、その代表的な

いくつかのものをリストします。すでに 12 章 8～10 節でも似たようなリストが述べられていました。重複するところもあります。ここでは 8 つのことがあげられています。これらを 4 つに分けて考えることができるかと思えます。まず第一のグループは最初の三つ、使徒たち、預言者たち、教師たちです。これらについては「第一に」「第二に」「第三に」と番号が振られていて、その後に述べられるものとは区別されているように見えます。これらがまず先に、その後のものと区別して述べられているのはなぜでしょうか。これらは御言葉と関わる働き人たちであり、御言葉に関わる務めはそれだけ重要であるという意味があるのかもしれませんが。しかし先に見たように神が与えてくださっている賜物や奉仕や働きはみな尊いものです。かえって人の目に止まらない地味な働きこそ、なくてはならない大切なものだと言われました。そういう意味ではこの三つを特別に持ち上げ過ぎることは注意が必要であるとも思われます。ある人は教会を考える際、その設立にあたっては時間的な順序から言って、これらの働きがまず先に来る。だからこれら 3 つが優先して述べられているのだろうと言っています。つまり教会が新しく建てられるためにはまず使徒のたちの働きが必要。その教えが土台です。そしてその使徒的福音を宣教し、人々に向かって奨励する預言者たちが次に来ます。そしてその福音の教えを体系的に説明したり、実生活への適用について人々に教える教師たちが必要です。こうした働きによって教会の基本的な土台が据えられて、クリスチャンの交わりが存在し、兄弟姉妹の色々な賜物がその役割を果たせるようになる。そういう意味での最初の 3 つが優先して述べられているのだろうと言っています。いずれにしろ、私たちが心に留めるべきは、これらの御言葉に直接関わる働き人たちは神が教会に与えてくださったもの、備えてくださったものであるということです。

そして次に様々な賜物が述べられます。二つ目のグループは「力あるわざ」と「癒やしの賜物」です。「力あるわざ」という言葉には印がついていて欄外に「あるいは奇跡」と記されています。この奇跡と癒やしの賜物は 12 章 8～10 節の賜物のリストにも出ていました。そちらでは先に癒やしの賜物が述べられ、その後で奇跡を行う力が述べられていました。今日見ている箇所と反対です。ここからもこれらの賜物のリストは単純に重要な順番で並べられているわけではないことが伺えます。一つ目と二つ目のリストの順番は違うからです。この二つの奇跡的な力に関わる賜物は特に新約聖書が完結する以前に必要とされた特別の賜物であったと考えられます。

第三のグループは「援助」と「管理」です。第3版まではここはそれぞれ「助ける者」また「治める者」と訳されていました。「援助」また「助ける者」とは、弱い人々を助け、配慮する働きのことであり、これは今日の執事的な働きと関わるものだろうと多くの注解者はコメントします。また一方の「管理」、第3版までは「治める者」と訳されていた言葉は船のかじ取り、船長、パイロットを指す言葉です。全体の方向性を導く働きのことです。こちらは今日の長老の働きと関わるものだろうと注解者たちはコメントします。ローマ人への手紙12章6～8節にも賜物のリストが出て来ますが、その中の12章8節に「指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は喜んでそれを行いなさい」とあります。こちらでも「指導する人」が長老に当たり、「慈善を行う人」が執事に当たると言われます。これらの働きも神が教会に与えてくださった賜物です。

そして最後四つ目のグループが最後の「異言」です。注目すべきはここでも異言が最後に述べられていることです。コリント人たちは、神が教会に与えた賜物を数え上げようとするなら、異言を真っ先にあげたことでしょう。皆がこれにあこがれ、これを熱望していました。ところがパウロがあげるリストではなかなかそれが出て来ないばかりか、何と一番最後にやっと出て来ます。これが異言には意味がないとか、それを軽んじて良いという意味ではありません。パウロが一番最後に置いたのは、これがコリント教会で問題になっていたためです。彼らの考えに水を差すためです。異言だけが特別に重要であるのではないのだよ！と。

そして彼は続けて言います。29～30節：「皆が使徒でしょうか。皆が預言者でしょうか。皆が教師でしょうか。すべてが力あるわざでしょうか。皆が癒やしの賜物を持っているでしょうか。皆が異言を語るでしょうか。皆がその解き明かしをするでしょうか。」この問いに対する答えはもちろんノー！です。皆が使徒であるわけではありません。それと同様、皆が異言を語る者になることを求めて、それで競ったり、それで互いを比べて高ぶったり、がっかりしているのはナンセンスです。神は教会の中で一人一人に違う賜物と働きを与えています。その御心をわきまえて、自分に与えられた賜物に従って、それにふさわしい働きをすることに徹すれば良いのです。それぞれに与えられている賜物と働きはみな違うのです。

さてそう述べた上で最後の31節でパウロは「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい」と言います。これを読んである人は戸惑うかもしれません。パウ

パウロはこれまで神はみこころに従って、それぞれに違う賜物を分配しているのだから、それを受け止め、ある意味でそれに満足し、与えられているものを活用することに専心せよと言って来たのではなかったか。なのにここで、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさいと言っている。ということは今持っているものに満足せず、もっと上を目指せ！と言っているのか。これは今まで言われて来たこととどう調和するのかということです。そして思うことは、では私たちが熱心に求めるべき「よりすぐれた賜物」とは具体的に何なのかということです。答えから先に言うなら、そのことは次の13章をまたいで14章で述べられます。13章は愛の章と呼ばれる章ですが、その話を終えた後、パウロは14章1節で「愛を追い求めなさい」と述べ、「また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい」と言います。この「熱心に求めなさい」という言葉は、12章31節の「熱心に求めなさい」という言葉と同じです。つまりパウロは12章31節で「よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい」と言った後、その話を一旦中断して13章の内容を語り、それを終えて後、14章で先話を再開したと考えられます。つまり私たちが熱心に求めるべき、よりすぐれた賜物は14章で説明されます。その詳しい内容は14章を見る時に見ますが、14章冒頭の数節（たとえば5節くらいまで）を見ると、そこには異言よりも預言がまさると言われています。その理由は、それが人々に理解できるものだからということです。そちらの方が人々の成長に仕えるもの、教会の成長に役立つものであるからということです。異言は解き明かされないと人々には外国語のようでしかありません。そういう意味で預言の方がすぐれていると言われます。14章最後の段落の39節でも「ですから、私の兄弟たち、預言することを熱心に求めなさい」とあります。この「熱心に求めなさい」という言葉も先の12章31節、14章1節と同じ言葉です。ですから求めるべき、よりすぐれた賜物とは、預言を代表とする、人々の成長に役立つ賜物、みなに益に仕えることができる働きを指すと言えます。そのことをパウロは語ろうとしたのです。

しかしその話を始める前にもっと大切な、より根源的なことを話す必要を彼は覚えました。そこで話を一旦中断して31節後半で「私は今、はるかにまさる道を示しましょう」と言ったのです。この「はるかにまさる道」とは何でしょうか。それが13章で語られる「愛」という道です。ある人は31節前半で「熱心に求めなさい」と言われた「よりすぐれた賜物」が「愛」なのではないかと考えますが、そうではないと考えられます。賜物はこれまで見て来た通り一人ひとりみな違います。しかし愛はそうではありません。愛は皆が持つべきものです。ガラテヤ人への手紙5章22～23節に御

霊の実のリストが出て来ますが、そのトップに「愛」が述べられています。これはクリスチャンが持っても持たなくても良いものではなく、全員が身につけるべきものです。御霊を受けた人がみな示すべき特徴です。コリント人たちは御霊の賜物、特に異言を話せるかどうかということで頭が一杯でした。しかしそのようにただ御霊の賜物を求めるだけでは、コリント教会が実際にそうだったように、分裂に至りかねません。彼らが進んでいたのは共同体にとって破壊的な道でした。そのような道にはるかにまさる道についてパウロは語るのです。それが愛という道です。

つまりこのことは賜物は愛という道を歩くこととセットで考えられなければならないということです。もしこの愛という道を歩まなければどうなるでしょう。次回13章1～3節で見ると、すべてはむなしくなります。たとえ異言で話すことができても、あるいは預言の賜物を持ち、あらゆる奥義と知識に通じていても、愛がないなら無に等しいと言われます。私の持っている物のすべてを分け与えても、あるいは私のからだを差し出しても、愛がなければ何の役にも立たないと。私たちのするすべてのことに価値と意味を与えるのは、そこに愛があるかどうか、それが愛によってなされているかどうかであると言われます。その愛がなければ価値はゼロであると言われます。その愛の必要性をパウロは13章で語ります。その上で14章で元の話に戻って、熱心に求めるべきすぐれた賜物について述べるのです。

今日の箇所からまとめとして次の二つのことを心に留めたいと思います。一つは私たちはキリストのからだの中の一つの部分に相当する者であるということです。一人で全部を持つものではありません。あるいは一人で完成した人間になるものではありません。ですからある一つの賜物にだけ注目し、皆がこれを持たなければと格闘したり、それで競う必要はないのです。御霊は賜物を分配しています。私にもある賜物を分け与えてくださっており、その私に与えられた賜物・特性をもって、全体の益に仕えるようにと歩むことが肝要なことです。他の人々の比較は無用です。私には私にと神が与えてくださっているものがあります。それをを用いて他者と結ばれ、互いに支えられ、また支え合う交わりの中で、一つの豊かなからだを造り上げて行くようにと召されています。

そしてもう一つは、今のこととともに、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさいと言われていることです。今の状態にただ満足して、これ以上成長することは目指さない

というではありません。さらなる高みを目指して願い、祈り、取り組んで良いし、またそうすべきであると言われていています。その際に重要なのは愛という道に行くことです。自分一人のことで頭が一杯になるのではなく、周りの人々の益を心から願い、優先し、そのために自らをささげて仕える歩みをすることです。ですから私たちはより優れた賜物を熱心に求めるようにと言われていますが、それは自分の栄光のためではありません。自分が注目され、自分が人々から評価されるためではありません。14章で語られますように、それは皆の益のためです。共同体全体の祝福のためです。キリストのからだなる教会の一層の成長のためです。そのために、よりすぐれた賜物を熱心に求めることは良いことですし、むしろ大いに奨励されるべきこと、私たちが求めるべきことと言われていています。そのために今一度しっかり押さえるべきは、私たちが行くべき道は何かということです。踏み外してしまったら、すべてを意味のないものとする肝心な道は何かをはっきり知ることです。その「はるかにまさる道」について語るパウロの言葉に続いて聞きたいと思います。そしてその道を進むこととセットで、与えられている賜物をより良く発揮し、賜物を与えてくださった聖霊の御心にお応えし、神が備えてくださった祝福に豊かに歩む者、またそのことを通して神の栄光を現す教会の歩みへと導かれたいと思います。